

『中山最終レース』

大島健一郎

・あらすじ・

『第一話 ビギナーズラック』

北村裕子は子供の頃からデブと蔑まれ、更に家庭は崩壊と、暗い人生を生きてきた。高校卒業後、都内で看護師になった裕子は、院長の吾一郎と不倫の恋に落ちる。裕子と吾一郎は病院を辞め、無医村での開業を目指し、その資金を競馬の有馬記念で得ようとする。二人はギャンブル未経験であったが、有馬記念に出走する現役最強牝馬のシュガーレスラブと裕子の誕生日が同じで、また同レースに出走する他の馬の誕生日が吾一郎と同じであることを知る。二人はその二頭の組み合わせで大勝負をかけようとしたが、レース直前にシュガーレスラブが出走取消となってしまう。

『第二話 盗作』

デビュー作が当たっただけの一発屋の小説家・及川忠宏は、競馬と浮気が原因で糟糠の妻であったかなえと離婚するハメになる。忠宏は一念発起して小説を書きベストセラーになったのだが、実はそれは盗作で、その作者から口止め料五千万を要求される。忠宏は切羽詰まり、前借りした印税の三百万を有馬記念当日の新馬戦で二千四百万に増やすことに成功し、それを全額シュガーレスラブに突っ込もうとしたが、出走取消になり呆然とする。

『第三話 中山最終レース』

裕子は吾一郎との開業を諦めきれず、最終レースで出走馬の馬体重の重い順で3連単を十万円購入し、的中すれば三億五千万となるその馬券を見事に的中させるが、レース直後に吾一郎が心臓発作で急死する。一方忠宏は完全に追い詰められ、元妻のかなえの誕生日が昭和58年10月14日なので馬番が⑤⑧⑩⑭の馬を購入しようとしたが、その四頭の頭文字を繋げると『トウサク（盗作）』となるのを知り、購入を断念する。そして通信社に出向き、自作を盗作だと発表した。裕子は的中馬券を換金せずに無医村へ寄付し、大阪の病院で働き始めたのである。

・登場人物表・

『第一話 ビキナーズブラック』

北村裕子 (34・18・21・31)

主任看護師

門脇吾一郎 (41・44・54) 院長

門脇美花 (42・55) 副院長・院長の妻

武藤 (39) 事務局長

ちひろ (24) 看護師

水島良子 (37) 主任看護師

香織 (28) 看護師

北村作次 (55) 裕子の叔父

北村雅代 (51) 作次の妻

みのり (24) 看護師

百瀬千秋 (30) 主任看護師

門脇次郎 (47) 門脇吾一郎の弟

江田神三九三 (77) 村長

馬場良 (72) 入院患者

研修医

当直医

『第二話 盗作』

及川忠宏 (28・33・34・35)

小説家

小宮かなえ (28・33) 銀行員

城北直幸 (33・34) 清掃業者

悦子 (35) パート従業員

もん (41) パーのママ

小向 (35) もんの夫

村木 (41) 出版社芸部社員

林田久雄 (72) 作家養成所の所長

蓮根二三男 (51) 小説家

ミツコ (82) 作家養成所の生徒

銀行の案内係

神社の宮司

○ 競走馬シュガーレスラブのポスターにメ
インタイトル

『中山最終レース』

続けて

『第一話 ビギナーズラック』

○ コロナ禍真っ只中の病棟

防護服、フェイスガード、ゴーグル、手袋などで身を守った看護師達が、病室から溢れかえって通路にまでいる入院患者達を看護している。

酸素吸入の音、点滴ポンプの音、救命器具のアラーム音、駆け付ける看護師と医師。

それらの切迫した点描の中、一人の背の高い看護師がいる。主任看護師の北村裕子（34）だ。

○ 同・休憩室

看護師のちひろ（24）が疲れ切った顔でぼんやり座っている。

食べかけの菓子パンの脇に、新聞の社会面が広げられてある。

記事の見出しに『コロナ病棟で働く看護師へ差別の言葉』とある。

裕子が通りかかる。ちひろを気にして、

裕子「どした？ 大丈夫か？」

ちひろ「主任……私たちなんのためにこんなことやってるんですか」

裕子「……」

ちひろ「こんなの……あんまりや」

と、新聞をぐしやりと丸め、涙ぐむ。

裕子はちひろの背中をさすってやる。

ちひろ「……うち、もう、辞めたい」

裕子「……」

ちひろ「主任は辞めたくないんですか」

裕子「そうねえ」

と、窓外へ目をやり、

裕子「今辞めても、テレビや新聞は毎日コロナばかりよね、そうすると家にも私

はコロナから逃げたんだって思っちゃうしね。だったらコロナの現場にいた方がまだマシかな」

ちひろ「……」

裕子「そう思わない？」

ちひろ「……ですよね」

裕子「うん」

ちひろ「ですよね、うち、人生ちよっと甘く

考えてました、もう少し頑張ってみます」

裕子「うん」

ちひろ「あ、休憩終わるわ、どうもでした」

と、裕子にぺこりと頭を下げてからばたばたと行く。

裕子はちひろの後ろ姿に目をやってから、胸ポケットに挿してあるボールペンを取って眺める。それには『シュガーレスラブ』と印字されてある。

裕子はそれを弄びながら、呟いた。

裕子「私の人生、か……」

○ 裕子の小学校の卒業式のクラス集合写真
後ろの列の右端に、クラスメイトから完全に頭ひとつ背が高く、そして太っている裕子カメラを睨みつけるようにして写っている。

裕子N「私はコンプレックスを抱えて生きてきた」

○ 裕子の中学校の卒業式のクラス集合写真
小学校と同じく後ろの列の右端に、縦にも横にも更に伸びた裕子が唇をぎゅっと噛んで写っている。

裕子N「当然いじめられた。でぶ、ぶた、独活の大木なんて陰口はまだまだだった。給食の残りは全部、私の机の引き出しや下駄箱に突っ込まれた」

裕子の机の引き出しにカレーがこびりついている。

○ 裕子の高校の卒業式のクラス集合写真

完全に猫背になってしまったセーラー服の裕子が下を向いて写っている。

裕子N「少しでも背を縮めたいと思って背中を丸めていたら、猫背になってしまった。でも……」

○ 門脇総合病院付属看護専門学校

正面玄関に『入試面接会場』と看板が出ている。

裕子N「私は体形の他にもコンプレックスがあった」

○ 同・面接会場の部屋

着古したセーラー服姿の裕子（18）が、猫背で背中を丸めたままパイプ椅子に座り、面接を受けている。ひどく緊張している。

面接官は門脇総合病院の院長・門脇吾一郎（41）、その妻で副院長の美花（42）、事務局長の武藤（39）と看護専門学校の校長の四人である。

裕子「私は、その、門脇総合病院様の奨学金制度を使わせていたただき、看護師になりたいと思います」

と、どこか卑屈に言う。

美花「それはいいんだけど」

と、手にしていた裕子の履歴書を机に置く。

美花「あなたのお父さんは公務員だったそうだけど、公金横領で捕まったというのは本当なの？」

裕子は驚いて美花を見て、

裕子「ご存じだったんですか……」

美花「隠すつもりだったの？」

裕子「そういうわけじゃありません、でも……これは私の入試だし……」

美花「つまり父親は関係ないの？」

裕子「いえ……」

武藤「じゃお母さんは？」

裕子「母は……父が逮捕されてから、命を絶

ちました」

美花と武藤はまるで示し合わせたかのよう
うに、顔を見合わせる。

吾一郎は、じっと目を閉じている。吾一
郎も背が高い。

武藤「お父さんはなんで公金横領なんかを？」
裕子「スナツクの、女の人に……入れ込んだ
そうです」

武藤「お父さんは刑務所を出てから、今は何
を？」

裕子「……わかりません」

美花「わからないって、どういうこと？」

裕子「刑務所を出てから……父は姿を消しま
した」

美花「あなたはお父さんの罪をどう思ってる
の？」

吾一郎「もうよさないか」

と、目を開けると、不快感を露わにして、
吾一郎「そんなことを訊いてどうするんだ」

美花「そう仰いますけど」

吾一郎「北村君」

と、裕子をまつすぐ見ると、

吾一郎「君はどうしてそんなに背中を丸めて
いるの？ 君は何も悪いことをしてきたわ
げじゃないんだ。もつと胸を張りなさい。
もつと胸を張って堂々と生きるんだ」

裕子はびっくりして吾一郎を見る。

○ 同・部屋・前々廊下

扉が開いて中から裕子が出て来る。

裕子「よろしくお願い致します」

と、深々と室内に頭を下げながら扉を開
めて、廊下を歩き出す。

と、すぐに室内から、

「あなたなんであんな余計なことを言っ
たんです」

という美花の声が聞こえてくるが、扉が
開いて吾一郎が顔を出し、裕子呼び止
める。

吾一郎「北村君」

裕子が振り向く。吾一郎は後ろ手で扉を閉め、

吾一郎「裸のままで申し訳ないんだが」
と、白衣の内ポケットから財布を出すと、一万円札を十枚ほど取ってそのまま裕子の手に握らせ、

吾一郎「看護師の勉強をしながらスイミングスクールに通いなさい。猫背には水泳が一番なんだ。僕もそれで猫背を治したんだ」
それだけ言うと吾一郎はそそくさと歩き去る。裕子はぼかんとするが、すぐに感激して、

裕子「ありがとうございます！」

と、腰を折るようにして頭を下げた礼を言った。

○ 三年後・門脇総合病院の入職式の記念集合写真

六人の新人看護師の右端に、背筋をしゃんと伸ばした裕子（21）が写っている。

○ 門脇総合病院・ナースステーション
窓から東京スカイツリーが見えている。
主任看護師の水島良子（37）が裕子をプリセプターの香織（28）に引き合わせる。

良子「香織、北村さんのプリセプターお願いね」

香織はパソコンに看護計画を打ち込みながら、

香織「私今、受け持ち多いんですよ」

良子「そう言わないでさ」

香織「だいたい今年の新人って五人って聞いてましたよ、なんで六人なんですか」

良子「院長粹でしょ」

香織「院長粹って、またですか」

と、面倒くさそうに、

香織「院長粹が入った子ってすぐ辞めるんですよ、教えるだけ無駄なんじゃないですか」

良子「とにかく頼んだわよ」

と、行ってしまう。

香織「あー」

と、舌打ちして席を立ち、歩き出す。

裕子「あの」

香織「採血」

と、さっさと行ってしまう。とにかく後を追う裕子。

○ 同・職員通用口（夕）

もう夜に近い。

勤務を終えた裕子が沈んだ顔で出て来る。バッグの中で携帯が鳴る。

○ ファミレス（夜）

くたびれたジャンパー姿の中年男と、威圧感たっぷりアイスコーヒーの氷をかみ砕いている中年女がボックス席にいる。男は気弱そうな顔をして貧乏ゆすりをしており、女はヒョウ柄のトレーナーを着ている。小さなスーパーを経営する北村作次（55）と妻の雅代（51）だ。

雅代「いいかい」

と、アイスコーヒーの残りをずっと飲むと、

雅代「一生むしり取るから小出しに言うんだよ」

作次「お前……いくらなんでもかわいそうだろう」

雅代「なに言ってるんだい、あなたの兄さん夫婦のせいで育てるハメになったんじゃないか」

作次「まあそうだけど……」

雅代「食費にいくらかかったと思ってんだい」

作次「……ほとんど売れ残りだろうが」

雅代「なんだって」

作次「いや……」

雅代「言いたいことがあるんらはっきり言いなよ」

作次「……」

雅代「まったく……そんなに気が弱いから店

も上手くいかないんじゃないか」

作次「だってよ、何も無理してスーパーなんかにしなくても……八百屋のまんまで良かったんじゃないのか」

雅代「もう今更なに言ってるんだい」

扉が開いて裕子が来るのが見える。

雅代「来たよ」

と、実に愛想のよい笑顔で、

雅代「裕子ちゃん、久し振りだね」

裕子は硬い表情のまま、

裕子「おばさん、おじさん、お久し振りです」

雅代「よしておくれよ、そんな他人行儀。さ

さつ、座って座って。おねえちゃん、コー

ヒーっつね」

裕子は作次の隣に座る。

雅代「それでね、裕子ちゃん、お給料はいつ

出るんだい？」

裕子「二十五日ですけど……」

雅代「悪いんだけどさ、これから毎月四、五万ぐらい用立ててもらえると助かるんだけどねえ」

裕子は金額に驚き目を見張る。

作次「（も驚き）四、五万ってお前……」

雅代「私らだってあんなに苦しい時に裕子ちゃん引き取って育てたんだよ、それは分つてもらえるよね？」

裕子「はい……」

雅代「店は今だって苦しいんだよ、裕子ちゃんだって自分が育ててもらった店が潰れちゃったら寝覚めが悪いだろ？」

裕子「……」

○ 門脇総合病院・ナースステーション（数

日後）

香織が裕子に怒りを爆発させている。

香織「なんにもできやしないじゃないの、採

血も食介もオーダーの処理もサマリーも！

あんた学校で何を学んできたのよ！」

裕子「（項垂れ）……すみません」

香織「だから院長梓の子って嫌なのよ」

裕子「……」

香織「あんなにかただの独活の大木じゃん、時間の無駄なのよ」

裕子「身体のことと言わないでもらえますか」

香織「なっ……」

裕子「体形のこととは言われたくありません」

香織「なに正論ぶってんのよ、使えないから

独活の大木って言ってんでしょ！」

裕子「……（口惜しさをぐっところえる）」

回りの看護師たちも見下したように裕子を見ている。

○ 同・屋上

白衣姿の吾一郎（44）が給水塔の前で煙草を吸っている。吸い終えんとすぐに二本目を出して火をつけ、美味そうに煙を吐き出す。

と、泣き声が聞こえる。

吾一郎「……？」

給水塔の陰をそと覗くと、裕子が嗚咽を漏らしながら泣いている。

吾一郎「泣きたい時は泣いた方がいい」

裕子「はっとして顔を上げ、

裕子「院長……」

吾一郎「涙を全部出さない」

裕子はわーっと声を出して泣くと吾一郎に抱きつく。そして吾一郎を強く抱きしめてわんわん泣く。吾一郎は優しく裕子の背中をさすってやる。

雨が降ってくる。

すぐに雨脚が激しくなるが、二人はそのままにいる。

○ 門脇総合病院・病棟の廊下

T『10年後・2017年12月』

裕子（31）が走って行く。

前方の角からストレッチャーが曲がって来るが、裕子は大柄な体に似合わぬ俊敏な動きで躲して走って行く。

擦れ違う看護師が何事かと裕子を振り返

る。

○ 同・病室（個室）

糖尿病の患者、馬場良（ばばりよう・フ
2）の個室である。壁に競走馬・シユガ
ーレスラブのポスターが貼ってある。
看護師のみのに（24）が点滴の交換を
しながら、

みのり「馬場さん、顔色すっごくいいですよ」

馬場「ええて、そんなおべっかは」

みのり「ホントですって」

馬場「ねえちゃん、頼みがあるんや」

みのり「なんですか」

馬場「引き出しの、三段目を開けてもらえん
か」

みのり「ここですか？」

と、サイドテーブルの三段目の引き出し
を開けると、帯付きの百万円の札束が一
つ、無雑作に入っている。みのり、ちよ
つと驚くが、

みのり「ニセモノ、ですよね？」

馬場「あほ、本物や」

と、ベッドを起こし、

馬場「あんたの裸を見させてもらたらそれあ
げるで」

みのり「……セクハラって知ってます？」

馬場「二段目を開けてみい」

みのり「（ためらうが、開ける）」

帯付きの百万円の札束が二つ、入ってい
る。

馬場「あんたのオチチを舐めさせてもらたら
それもあげるわ」

みのり「いいかげんにしてください」

馬場「一番上を開けてみい」

みのり「嫌です」

とは言うものの、好奇心はあるようだ。

馬場「いいから開けてみい」

みのり「開けるだけですからね」

と、言い訳がましく開けると『全部嘘や』
と書かれた紙が入っている。

みのり「もう、馬場さんったら!」

馬場「がははと笑い、

馬場「本気にしたやろ」

みのり「しりません」

と、点滴を始めようとするといきなり扉が開いて裕子が入って来る。

みのりは驚き、裕子は走って来たことを

感じさせない落ち着いた口調で、馬場へ、

裕子「ナースコールの点検です」

馬場「点検？」

みのりも「？」となる。

裕子「ナースコールを見せて下さい」

馬場「これか？」

と、体をねじって枕元の柵に軽く結びつけてあるナースコールを取ろうとする。

裕子に背を向ける格好になる。

その隙に裕子はみのりがセットした点滴ボトルを素早く外して、自分が持つて来たボトルをセットする。

みのり「(ミスに気づき)！」

馬場「これどないすんのか」

と、馬場が振り向いた時には裕子は個室を出て行ってしまっている。

○ 同・ナースステーション

裕子がみのりに厳しく注意を与えている。

その裕子を、主任看護師の百瀬千秋(3

0)が難しい顔をして見ている。

裕子「危うく医療事故よ」

みのり「……すいません」

裕子「あの患者さんは馬場良さんよ、でもあ

なたはこれをセットした」

と、外した点滴ボトルを見せる。患者氏

名欄には『馬場良』とある。

裕子「申し送りでも注意するように言っただけです」

みのり「……」

裕子「なぜきちんと確認しないの」

みのり「……でも私、馬場さんからセクハラを受けたんです」

裕子「今はそんな話をしてないでしょ」

みのり「看護師あるあるで済ませるんです

か？ それに先月も一人辞めました、お

かげで夜勤の回数が増えて体がくたくたなん

です、ヒヤリハットが起きても仕方がない

んじゃないですか」

裕子「論点のすり替え。自分がした事を棚に

上げないで頂戴」

みのり「ちよっとそれひどすぎませんか」

千秋「はいそこまで」

と、割って入り、みのりへ笑顔で、

千秋「はい深呼吸」

みのり「……」

千秋「(穏やかに)深呼吸」

みのり「……(深呼吸を二度、繰り返す)」

千秋「(笑顔で頷き)さっ、バイタルの時間

よ、落ち着いてね」

みのり「はい」

と、千秋に頭を下げ出て行く。

裕子「主任。よろしいんですか、これで」

千秋「北村さん、ちよっといいですか」

○ 同・ナースステーション内の一室

裕子と千秋。

千秋「勝手に注意するのはやめてもらえませ

んか」

裕子「なぜです」

千秋「みのりさんにはちゃんとインシデント

レポートを提出してもらいますから」

裕子「答えになっていません」

千秋「あなたの仰りたいことは分かります、

ですが……欠員状態でシフトを回してるん

です、分かってもらえませんか」

裕子「命を扱う仕事をしてるんです。若い看

護師への再教育が必要だと思えます」

千秋「看護師の数が足りていれば、私もそう

言うでしょう。あまり杓子定規になるのも

どうかと思います」

裕子「私はそうは思いません」

千秋「そう。じゃ仕方がないわね」

と、部屋を出て行く。

裕子「……」

○ 同・院長室

吾一郎(54)と美花(55)が言い争いをしている。

吾一郎「私は反対だ」

美花「これが一番いいんじゃないかしら。北

村さんに夜勤専任をお願いしましょうよ」

吾一郎「夜勤は主任看護師が管理すると決ま
っているはずだ」

美花「でも千秋さんには小さなお子さんがい
るのよ、それなのに夜勤専任だなんて世間
が知ったらどう思うかしら」

吾一郎「最初からそのつもりだったのか」

美花「なにが？」

吾一郎「最初からそういう約束で、今の主任
看護師をヨソから引っ張って来たのか」

美花「なんとでもおっしゃい」

と、ドアへ向かい、

美花「あなたは病院経営が分かってないのよ
と、出て行く。

吾一郎「……」

○ 同・馬場の個室(翌日)

裕子が点滴の交換をしている。

馬場「なんや今日は若い娘じゃないんかい」

裕子「ご気分はいかがですか」

馬場「最悪や」

裕子「じゃお大事になさってください」

馬場「あんたも相当嫌われてるそうやな」

裕子「おかげさまで」

馬場「前の主任看護師はんが辞めおって次は
自分やと思っとったら、ヨソから新しいの
が来たそうやないか」

裕子「……」

馬場「しかも年下や」

裕子「たった一つですよ」

馬場「だったら尚更や。いっこ下でもヨソか
ら呼んでくるっちゅうことは、あんたは全

然買われてないっちゆうことやる」

裕子「前から気になってたんですけど」

馬場「なんじゃい」

裕子「この馬のポスター、なんですか？」

馬場「シユガーレスラブ、知らんのかいな？」

裕子「まったく」

馬場「あなたは競馬をやらんのか？」

裕子「まったく。馬場さんはやるんですか？」

馬場は心底呆れたように、

馬場「あんなあ、ねえちゃん、わいの名前は

馬場良でっせ、馬場良。競馬やらんでどな

いすんのや、全国の競馬ファンの皆様も突

っ込んでるで。そしてこのお方が」

と、ポスターを拝みながら、

馬場「シユガーレスラブ様や、史上最強牝馬

(ひんば)や、牝馬ってのはメスのことや、

7戦7勝、無敗のダービー馬や。それどこ

ろか無敗のまま秋の天皇賞ぶっこぬいて、

お次のジャパンカップもぶっちぎりや。そ

して今度の有馬記念で引退すんのや。わい

なんかこのシユガーレスラブ様のおかげで、

儲かって儲かって仕方がないのや」

と、拜むのを止めて裕子を見ると、裕子

は個室を出て行ってしまっている。

馬場「このバチ当たりが！」

○ 裕子のマンション(夜)

入口の蛍光灯がちかちか点滅し、黒ずん

だコンクリートの階段にはヒビが入って

いる古いマンションだ。

○ 同・裕子の部屋(夜)

布団の上で寝巻き姿の吾一郎が全裸の裕

子の上に荒々しくのしかかっている。

裕子は喘ぎ声を押し殺しながらも激しく

応えている。

吾一郎の腰の動きが早くなり、やがて果

てる。裕子の下半身が震え、裕子は吐息

を漏らす。

×

×

×

裕子と吾一郎が布団の上でまどろんでいる。

雨が降ってくる。

雨脚はすぐに激しくなる。

裕子「……」

(フラッシュ)

激しい雨の中、給水塔の前で裕子が泣きながら吾一郎を強く抱きしめている。

吾一郎「(雨音を聞きながら)……十年経ってしまっただね」

裕子「……」

吾一郎「僕たちの、これからの事なんだが……真剣に考えてみないか」

裕子「……」

吾一郎「君はこのままあの病院にいても、主任にはなれない……夜勤専任で飼育殺しにされるだけだ」

裕子「でも私は、院長のお傍を離れたくありません」

吾一郎「診療所をやらないか？」

裕子「診療所？」

と、身を起す。

吾一郎「僕の弟が村役場にいるんだが、診療所の話だけでも聞いてもらえないかと言ってきてるんだ」

裕子「でも奥様は」

吾一郎「あつちはあつちで事務局長の武藤とよろしくやってるさ」

と、煙草を啣え、裕子がライターで火をつける。吾一郎は煙を吐き出し、

吾一郎「病院の婿養子なんかになるもんじやないね」

○ 吹雪の中、奥深い山あいの道を一台のジープが走って行く。車のボディに『江田神村』とある。

○ 同・車内

吾一郎の弟の次郎（４７）が運転し、後部席に裕子と吾一郎がいる。

次郎「懐かしいだろ、兄ちゃん」

吾一郎「ああ」

と、目を細めて辺りを見ている。

○ 村役場・前

ジープが停まっている。

○ 同・村長室

応接セットのソファーに裕子と吾一郎、

次郎、村長の江田神三九三（７７）が座っている。

江田神「場所は、あそこなんですわ」

と、窓の外を指差すが、吹雪で見えない。

次郎「村長、途中で見てきた」

江田神「そうかそうか」

吾一郎「回りを田んぼに囲まれた、ちょっと高台ですよね」

江田神「はい、あそこに診療所を建てるつもりでおるのです、いわば村民の悲願なんですわ」

次郎「ただその、建物が……」

江田神「正直に申し上げます」

と、身を乗り出し、

江田神「土地は役場の土地なのでタダですし、医療器具は全てリースでまかさないです。いろんな医療器具メーカーに問い合わせたところ、もう売り込みが来てますし、安くできそうです。勿論そのリース料も村の予算に組み込みます。そして失礼ですが……先生には年に一千二百万、奥様には、いやその、看護師さんには三百万お支払いできますが……」

吾一郎「診療所を建てる費用はこちらもち、ということですか」

江田神「虫のいい話で恐縮なのですが、そこ

までの予算がないのです」

次郎「それと、兄貴と裕子さんが暮らす家も建ててもらわねえと……」

吾一郎「ふむ……」

裕子「ここから一番近い病院までは、どれくらい……?」

江田神「車で三時間かかります」

裕子「じゃ救急の時は?」

次郎「都会の人はドクターヘリを飛ばせばいいべって言うかもしれませんが、ここらの山は気流が発生しやすくてヘリが飛べねえんですよ」

江田神「今年だけでもう二人も車で搬送中に亡くなってるんです」

裕子「……」

○ 高台にある診療所予定地

裕子と吾一郎がいる。次郎のジープが少し離れた所に停まっている。

吹雪は止み、薄日がさしている。雪が積もり冷え冷えとした村全体を見渡すことができる。

吾一郎「どう思う?」

裕子「建てるとなると、診療所の他に一時的に入院できる施設も欲しいですね。それにリハビリ施設も。私たちが暮らす家にも床暖とかも必要ですし」

吾一郎「床暖か……」

と、おかしそうに、

吾一郎「すっかりやる気だね」

裕子「院長もそうですよね?」

吾一郎「(苦笑して頷き)となると問題は資金だね。僕の貯金は二十万しかないんだ」

裕子「私は八百万だけです」

吾一郎「合わせて二千八百万か……僕はもう五十四だからローンは難しいだろうし」

裕子「こうしませんか? とりあえず一億作りませんか、一億作ってから考えてみませんか」

吾一郎「(笑って)とりあえず一億って……」

そんなアテがあるのかい?」

裕子「馬場さんが、儲かって仕方がないって言っていましたよ」

○ 門脇総合病院・馬場の個室（翌日）

馬場「そんなの無理に決まっとるやろ」

裕子「でも儲かって仕方がないって」

馬場「あんたのおじさんが自己資金二千八百万なんてウソやろ」

裕子「今はその説明じゃなくて」

馬場「欲望に目がくらんだら、男やな？」

裕子「悪いですか？」

馬場「欲望に目がくらむとな、当たるモンも当たらんようになるで」

裕子「……」

馬場はスマホを操作して、自分の馬券口座を裕子に見せる。

残高は二千万ちよつとになっている。

裕子「儲かってるじゃないですか」

馬場「競馬をやったことがないさかいそう言うのや」

と、ため息を漏らすと、

馬場「シユガーレスラブの単勝を新馬戦から三万で始めてずつと転がしてきたんや。それで二千万になったんや。ずつと一頭の馬を追い続けてこの金額になったんや。これが競馬の醍醐味なんやで。ただの金儲けとは違うんや。最初から二千万も突っ込んでパーになったら、頭真つ白どころか首くくらなあかんやろ」

裕子「でも馬場さんはこれを全額有馬記念に突っ込むんですよね？」

馬場「そうや。でも万が一それでパーになつても元手は三万や、死ぬ間際にいい夢見させてもろたですむやんか、あの世に行つても競馬ファンに自慢できるわ」

裕子「ちなみに」

馬場「なんや」

裕子「シユガーレスラブに二千八百万突っ込んだらいくらになるんですか」

馬場はパチパチと珠算する仕草をして、馬場「よくて四千二百万。シユガーレスラブの単勝オッズは1.3 から1.5 倍やろ」

裕子「……」

馬場「悪いこと言わん、やめとけ」

裕子「……」

○ 本屋（数日後）

吾一郎が競馬週刊誌を立ち読みしている。シュガーレスラブの戦績とプロフィールを読んでみると、

吾一郎「ほう……」

○ 繁華街の路地裏にある喫茶店

どこか隠れ家的な小さな店である。

○ 同・店内

裕子がカプチーノを飲んでいる。扉が開いて吾一郎が入って来て、裕子の前に座ると、

吾一郎「これだよ」

と、バッグから競馬週刊誌を出し、有馬記念特集のページを開いて裕子に見せる。注文を取りに来たウエイトレスに、

吾一郎「いつもので」

ウエイトレス「カフェオレの、甘さきつめですね」

吾一郎「うん」

ウエイトレス「かしこまりました（と去る）」

吾一郎「ここ見てごらん」

と、シュガーレスラブのプロフィールを指差す。

裕子「（見て）ほんとだ」

吾一郎「シュガーレスラブの誕生日は君と同じ四月十九日なんだ」

裕子は何とも言えぬ顔をする。

吾一郎「それだけじゃない」

と、ページをめくって、有馬記念に出走するドクターウオークを指差して、

吾一郎「この馬は僕と誕生日が同じなんだ」

裕子は思わず吾一郎の顔を見る。

吾一郎「よりによってドクターウオークだ

よ？ これはもう偶然とは思えない」

裕子「やりましょう」

吾一郎「うん。この二頭で勝負しよう」

○ ラブホテル

吾一郎が全裸の裕子を後ろから激しく突いている。

裕子「うっ、うっ……!!」

裕子は目をうるませて応える。吾一郎が乳房を掴む。

裕子「あっ」

吾一郎、更に激しく突く。裕子は歓喜の声を漏らす。

吾一郎、やがて果てる。

裕子「あっ」

裕子は崩れ落ち……ぐったりする。

×

×

×

吾一郎がベッドで煙草を吸っている。裕子はまだ横になっている。

吾一郎「(照れたように) 大金を賭けるとなると……なんかその、燃えるね」

裕子は半身を起こすと、豊かな胸を押しつけるようにして吾一郎にもたれかかる。

○ 門脇総合病院・病棟の廊下 (翌日・深夜)

馬場の個室の扉が開き、室内から懐中電灯を手にしたみのりが出て来る。ラウンド

ド (夜間巡回) である。

と、競馬週刊誌を持った裕子が来る。

裕子「おつかれさま」

と、みのりと擦れ違い、馬場の個室に入ろうとする。

みのり「(思わず) そこたった今ラウンドしました、私のラウンドじゃ不安ですか？」

裕子「馬場さんに週刊誌を届けるだけよ」

と、個室に入る。

○ 同・馬場の個室 (深夜)

裕子が入って来て、サイドテーブルの上に競馬週刊誌を置く。

馬場はこちらに背を向けている。

眠っているようにしか見えないのだが、裕子は反対側に回り込み、馬場の顔をちやんと見る。

裕子「!」

馬場の顔はびっしょりと汗をかいており、目は半開きである。

○ 同・廊下（深夜）

裕子が馬場を載せたストレッチャーを猛然と押して行く。後から当直医と研修医が走って来る。馬場は意識を失ってしまっている。

○ 同・集中治療室（深夜）

馬場の処置が慌ただしく行われる。裕子が素早くグルテテストセンサーで血糖値を調べて、

裕子「血糖値30切ってます!」

当直医「グルコースをワンショット、急いで!」

裕子「はい!」

と、大急ぎでアンプルを用意する。

研修医が心電図モニターをセットし、続けてラクテックの点滴ボトルを急いでセットしながらモニターを見て、緊迫した声で、

研修医「心拍110です!」

当直医がグルコースの注射をしながら、

当直医「ラクテック早く、あとマスクも!」

裕子「はい!」

裕子が人工呼吸器をセットし、研修医が点滴を落とし始める。

ドアの所にみのりが呆然と立ち尽くしていた。

○ 同・集中治療室の前の廊下（朝）

裕子が立っている。ガラス越しに、馬場が当直医の問いかけに対してちゃんと答えているのが見える。

裕子はホッとして立ち去ろうとすると、

隣に千秋が立っている。

裕子「……」

千秋は馬場を見ながら、

千秋「あと三十分遅かったら低血糖で意識不明、脳に障害が残ったそうです」

裕子「……」

千秋「若い看護師への再教育を徹底させます」

と、裕子にきちんと頭を下げて去って行く。

裕子「……」

○ 同・馬場の個室

裕子が眠っている馬場の様子を見ている。

馬場が目を覚ます。

裕子「馬場さん？」

馬場「……ねえちゃんは命の恩人やな」

裕子「オーバーですよ」

馬場「……引き出しのな、いっちゃん上を開けてくれ」

裕子「今度は何が出てくるんですか？」

と、開ける。

馬場「シユガールスラブのボールペンが入ってるやる」

裕子「はい」

と、取って馬場に差し出す。

馬場「それ、ねえちゃんにやるわ」

裕子「馬場さんの宝物なんじゃないんですか」

馬場「いいから、やるわ」

と、ニカッと笑い、

馬場「それ持つとるとな、儲かって儲かって仕方がないでえ」

と、真顔になり、

馬場「シユガールスラブで勝負してこんかい」
裕子「（頷いた）」

○ 中山競馬場・全景

有馬記念当日。スタンドは超満員となっている。

○ JR船橋法典駅・ホーム

満員電車が到着し、競馬ファンがどっと降りて中山競馬場への専用通路へと急ぐ。その中に裕子と吾一郎がいる。

○ 中山競馬場・スタンド内

オッズを表示するモニターテレビの前に裕子と吾一郎がおり、有馬記念のオッズを見ている。

シュガーレスラブからドクターウオークへの馬単は、5.8 倍になっている。

裕子「二千八百万かける5.8 倍で……」

吾一郎「一億六千二百四十万、だな」

二人は顔を見合わせるとふふふと笑顔で、吾一郎「床暖いくつ買えるかな？」

裕子は声を上げて笑う。

○ 同・パドック

有馬記念のパドックである。

パドックを取り囲む無数の人々が、有馬記念に出走する各馬が現れるのを今か今かと待っている。

裕子と吾一郎も、シュガーレスラブとドクターウオークが現れるのをじりじりと待っている。

その時、どよめきが起こる。

裕子・吾一郎「？」

どよめきは更に大きくなる。裕子と吾一郎は怪訝に顔を見合わせた。

○ 有馬記念のファンファーレと共に、『第二話 盗作』

○ 神社（早朝）

T『2011年・シュガーレスラブがデビューする5年前』

年配の宮司が社務所の前を竹ぼうきで掃いている。足音がしたので宮司がそちらを見ると、二十代後半と思われるカップルが鳥居をくぐって拝殿に向かって歩いて来る。

及川忠宏（28）と小宮かなえ（28）だ。かなえはずんずん拝殿に向かって行くが、忠宏は仕方なくついてきた感じだ。忠宏「神頼みなんかしなくても……」

かなえは賽銭箱の前に立つと、財布から千円札を出す。

忠宏「千円も？」

かなえ「ごちゃごちゃ言わない」

と、賽銭箱に千円札を入れると鈴緒を掴んで大きく揺らし、鈴を勢いよくがらんがらんと鳴らすと、深々と二礼し、ぱんぱんと二拍手し、隣で突っ立ったままでいる忠宏に、

かなえ「ちゃんとやる」

忠宏「あ、うん」

と、のろのろと二礼二拍手する。かなえはそれを見届けると、大きなはつきりとした声で、

かなえ「及川忠宏が大日本文学賞の新人賞を取れますように。及川忠宏が大日本文学賞の新人賞を取れますように」

忠宏「おい、聞こえるって」

かなえ「あんたもちゃんと言う」

忠宏「……新人賞が取れますように」

かなえ「もつと大きな声で」

忠宏「新人賞が取れますように」

かなえ「声が小さい」

忠宏「（半ばヤケで）新人賞が取れますように！」

かなえ「本当をお願いします、及川忠宏が新人賞を取れますように！」

宮司が忠宏とかなえを微笑ましく眺めている。

○ 繁華街の歩道（数日後）

忠宏が歩道を歩く人々をかき分けて猛然と走って行く。

○ 銀行・窓口カウンター

窓口業務のかなえが「88番の札をお持ち

ちのお客様、お待たせ致しました」と客を呼んでいる。座って待っていた中年の女性が席を立ち、窓口へ向かう。

と、店内へ走って入って来た忠宏がそのままかなえの窓口へ向かい、中年の女性を押しつけるようにして、

忠宏「かなえッ」

かなえ「（驚くが小声で）いま仕事中」

と、たしなめるが、忠宏の、汗だらけの顔と肩で息をしているただならぬ気配に、

かなえ「まさか」

忠宏「新人賞」

かなえ「取った？」

忠宏「取ったんだよ！」

かなえ「うそ！」

と、思わず立ち上がる。忠宏はカウンタ―越しにかなえを抱きしめ、かなえは満面の笑みでそれに応える。

○ 忠宏のアパート（三ヶ月後）

畳に直置きされた本が山積みになっている部屋の真ん中で、忠宏とかなえが抱き合い情熱的に舌を絡めている。

机の上には新人賞受賞作の単行本『僕が女房と出会う前』が置かれてある。

忠宏、唇を離し、

忠宏「結婚してくれるね」

かなえ「うん」

忠宏「かなえと一緒になら本屋大賞でも芥川賞でも直木賞でもなんでも取れる気がする」
かなえ「ノーベル文学賞もね」

忠宏「なんでも取ってやる、まかせとけ！」
と、自分自身に酔い、かなえを万年床に押し倒した。

○ 中山競馬場

↑ 『それから5年後（シュガーレスラブがデビューする年）』
レースが行われている。

二頭の馬が馬郡から抜け出してゴールへ

向かって来る。

スタンドで忠宏（33）が喚いており、隣で友人の城北直幸（33）はぐっと拳を握りしめている。

忠宏「そのまま！ そのままで!!」

だが二頭の馬はゴール寸前で後続馬に飲み込まれてしまう。

忠宏「ああっ！ くそっ!!」

直幸が遠慮がちに、

直幸「取った」

忠宏「マジか、3連単かよ」

直幸「いや、ワイドだ」

と、胸ポケットから馬券を取り出して見せる。

忠宏「ワイドなあ？」

と、小ばかにしたようにその馬券を見て、忠宏「お前一番人気の組み合わせをワイドで買ってんのかよ」

直幸「百二十円ぐらいつくかな」

忠宏「百二十円ぐらいって……お前さあ、競馬なんか十回やったら九回は外れるんだぞ、だったらデカいの狙ってどかんといけよ!」

○ 団地（夜）

酔っ払った忠宏がふらふらと階段を上がって行く。

○ 同・及川家（夜）

忠宏が玄関の鍵をがちゃがちゃ鳴らしながら扉を開けて入って来る。

狭いダイニングキッチンテーブルで小説を読んでいたかなえ（33）が、

かなえ「また競馬?」

忠宏「悪い、水くれよ」

かなえは水道の水をコップに汲んで忠宏に差し出す。忠宏は一息に呑み干し、

忠宏「直幸が行きたたって言うからさ」

かなえはそれが嘘だと分っている。

かなえ「あのさ、忠宏」

忠宏「シャワー浴びてもう寝るわ。おやすみ」

と、かなえと目を合わせることなく浴室
へ向かう。
かなえ「……」

○ スーパーマーケット（数日後）

パート従業員の忠宏が菓子類の品出しを
している。競馬場での強気な態度とは裏
腹に、鬱鬱と仕事をこなしている感じだ。
同じ品出し中のパート従業員の悦子（3
5）がそっと寄って来て、

悦子「あんた小説家なんだって？」

忠宏は戸惑い、

忠宏「……誰から聞いたんです？」

悦子「みんな知ってる。一発屋だって」

忠宏「……」

悦子「もう書いてないの？ 二冊目って出し
たの？」

忠宏「まあ、その……」

悦子「別に一発屋でもいいじゃん」

忠宏「……」

悦子「でもさ」

と、でへへへと笑う。

忠宏「……？」

悦子「実は私あんたの書いたの読んだんだ」

忠宏「えっ……」

悦子「面白かったよ、今度本にサインしてよ」

忠宏「（ぱつと笑顔で）はい」

○ ラブホテル（数日後・夜）

忠宏と悦子が正常位でつながっている。

忠宏は欲望のままに腰を動かし、悦子は

カニバサミで喘ぎまくっている。

と、忠宏が動きを止める。

悦子「？」

忠宏「（にやっと）ベッドの上では一発屋じ

ゃないよ、二発でも三発でもいくよ」

悦子は「きやはは」と笑い、忠宏はまた
腰を動かし始める。

○ 銀行（数日後）

かなえが窓口業務を笑顔でこなしている。

○ 同・更衣室（夜）

仕事を終えたかなえが着替えている。
ふと手を止めると、ロッカーの小さな鏡
を見る。

かなえ「……」

笑顔が消えるとひどくやつれているよう
に見える。

かなえ「……」

○ 繁華街の歩道（夜）

仕事帰りのかなえが歩いて行く。信号待
ちになる。

かなえ「……」

ぼんやりと周りを見ると、傍にあるカフ
エの窓際の席で、忠宏が女（悦子）とい
ちやついているのが目に入る。

かなえ「（思わず見やり）……」

○ 中山競馬場（一ヶ月後）

レースが行われており、各馬がゴールイ
ンしていく。

スタンドで忠宏が「くそつ」と馬券を破
り捨てる。

○ 及川家（夜）

泥酔した忠宏が玄関の鍵をがちゃがちゃ
鳴らしながら扉を開けて入ってくるが、
室内は真っ暗である。

忠宏は酔っ払い特有の大きな声で、
忠宏「帰ったぞ、っておい、いないのかよ」

と、明かりをつけてダイニングキッチン
に入り、蛇口を捻って水道の水を直に飲
もうとするが水を勢いよく出し過ぎてし
まい、着ている服をびしょびしょに濡ら
してしまう。

忠宏「おい、タオル、タオルって、本当にい
ないのかよ」

と、室内を見回すと、テーブルの上に離

婚届が置かれてあるのに気づく。

忠宏「(えっ……)」

かなえの署名捺印がされてある。

忠宏「……」

○喫茶店(数日後)

忠宏とかなえが向き合って座っている。

忠宏の表情は硬いが、かなえはさばさばしている。ウエイトレスが来て「お待ちせしました」と二人の珈琲を置いて去る。

忠宏「男か」

かなえは珈琲にミルクを入れ、かき回す。

忠宏「男ができたんだな」

かなえ「そんなのいやしないわよ」

忠宏「嘘だ」

かなえは珈琲を飲み、

かなえ「もう小説なんか書く気ないんですよ」

忠宏「(詰まる)……」

かなえ「小説から逃げ回ってるもんね」

忠宏「……」

かなえ「だからウサ晴らすように競馬やってるんですよ」

忠宏「今そんな話どうでもいいだろ」

かなえ「家計の足しになるからだなんて調子のいいこと言って、給料全部馬券につき込んでるんじゃない」

忠宏「……それが原因か」

かなえ「でもね、私は仕方がないって思ってた、今は書けない時期なんだ、いつかはまた必ず書ける時が来るって信じてた、でも」

忠宏「……でもなんだよ」

かなえ「浮気だけは許せない」

忠宏「……浮気なんかしてないぞ」

かなえ「悦子さんっていうんですよ」

忠宏は黙り込む。

かなえ「旦那さんはトラックの運転手で、子

供さんは保育園なんですよ」

忠宏「……なんで知ってるんだよ」

かなえ「後を尾けた。興信所も雇った」

忠宏「そこまでして……」

かなえ「そこまでして？ あんなみじめな気
持ちになったのは初めてだよ」

と、バッグから財布を出すと珈琲代の五
百円玉をテーブルに置き、

かなえ「とにかく別れて。もうそれだけ」

と、席を立つ。

忠宏「おい、待てよ」

と、こちらも席を立つ。

かなえ「異議があるなら訴えて。こっちも弁
護士でもなんでもたてるから」

忠宏「待てたら」

と、かなえの腕を掴む。かなえはそれを
振りほどき、

かなえ「もう人生を無駄にしたくないの」

忠宏「……」

かなえは店を出て行く。忠宏はその後ろ
姿を目で追い、

忠宏「……」

○ バー『葛藤』（夜）

コの字型のカウンターだけの小さな店
がある。客は忠宏だけで、忠宏は呷るよう
に水割りを飲み干すと、

忠宏「浮気ぐらいなんだよ、芸の肥やしつて
なんで分らないかな」

と、グラスをママのもん（41）に差し
出す。もんは水割りを作りながら、

もん「肥やしになるほど小説書いてないでし
ょ」

忠宏「知るかよ」

と、グラスを受け取る。

もん「でもね」

と、忠宏の手を優しく掴むと自分の手と
合わせ、指を絡ませながら、

もん「いっそのこと、落ちるとこまで落ち
ゃう？」

忠宏「……」

○ もんのマンション（深夜）

ベッドで忠宏がもんを愛撫している。

もんは喘ぎ、忠宏の顔を引き寄せると、
もん「……はやく」

忠宏がもどかしそうにトランクスを脱ぐと、突然髪の毛を後ろから掴まれてそのまま放り投げられる。

忠宏「!」

忠宏は無様にベッドから落ち、一瞬パニックに陥るが、自分を見おろしている男に気づく。

男（小向・35）は一目でそのスジの人だと分る風貌で、ニヤニヤと忠宏を見ながら、

小向「玄関の鍵ぐらいかけとかなきゃ、ボク」
忠宏は恐怖におののきながら、とにかく股間を両手で隠す。

小向「これ、僕の女房なの」

忠宏「（えつと驚き、ベッドのもんを見る）」
もんは忠宏を見向きもせずに、煙草をくわえて火をつけ、クールに煙を吐き出す。

忠宏「（絶望で）……」

小向「警察行こうか。それとも示談にする？」

忠宏「……じ、じだんで」

小向「聞き分けがいいね、ボク」

と、しゃがんで忠宏を見ると、

小向「百万」

忠宏「そんなに……」

小向は忠宏の腹を一発殴り、

小向「キャッシングでもしろよ」

忠宏は痛さで呻き、そして怯え、

忠宏「は、はい……」

○ オフィスビル・通路（翌日）

清掃中を知らせる札が立っており、清掃会社の作業着姿の直幸がポリッシャーをかけている。

直幸はベテランらしく慣れた手つきでポリッシャーを操っていく。

と、忠宏が来て、気まずそうに直幸に手を挙げる。

直幸「（気づき）……」

○ コンビニエンスストア・ATM
作業着姿の直幸が金をおろしている。

○ 同・店前

入口の脇に忠宏が立っている。直幸が店から出て来て、

直幸「裸のまままで悪いけど」

と、一万円札を五枚、忠宏に差し出す。

忠宏「悪いな、恩に着る」

と、頭を下げた受け取り、

忠宏「必ず返す。約束する」

と、立ち去ろうとすると、直幸が何やら言いたげな顔をする。忠宏はそれを察して、

忠宏「情けない男だっと思ってんだろ」

直幸「いや、それは前から思ってたけど……」

忠宏「(ムツとして) けどなんだよ？」

直幸「仕事のQCDSって知ってるか？」

忠宏「キューシー、なに？」

直幸「QCDS。クオリティ、コスト、デリ

バリー、セーフティ。セーフティはサポー

トって言う場合もあるけど」

忠宏「それがどうかしたのか？」

直幸「それじゃ5S (ごエス) は？」

忠宏「(ふざけて) どS、じゃないよな？」

直幸「(にこりともせず) 整理、整頓、清掃、

清潔、躰」

忠宏「知らねえよ」

直幸「うちみたいな孫請けの零細企業でもそ

ういうのに取り組み始めてるんだ。お前、

もうちよっと世の中の動きに敏感になれよ」

と、去る。

忠宏「なんだよ……」

○ 道路の工事現場 (数日後・深夜)

車線の一つ通行止めにして工事が行われている。警備員の忠宏が、光る誘導棒を振って通行車両に工事を知らせている。

○ 同（早朝）

工事が終わり、工事業者が引き上げて行く。忠宏も、警備員の制服の上にジャンパーを着ると、原付バイクで帰って行く。

○ 交差点（早朝）

忠宏の原付バイクが信号待ちをしている。

忠宏「……」

ふと思いついたように原付バイクから降りると、原付バイクを押して横断歩道を渡って行く。

○ 神社（早朝）

かつて忠宏とかなえがお参りに来た神社である。忠宏の原付バイクが来て、鳥居の傍に停まる。

○ 同・境内（早朝）

年配の宮司が竹ぼうきで社務所の前を掃いている。忠宏が来て、拝殿に向かう。

宮司が忠宏に気づき、呼び止める。

宮司「もし、そこのお方」

忠宏「（足を止め）自分、ですか？」

宮司は忠宏のもとに来て、

宮司「奥様は息災かな？」

忠宏「奥様？」

宮司「あなたは、及川忠宏さんじゃろ？」

忠宏「……なぜ「存じなんです？」」

宮司「前に奥様と声を合わせてお参りをして
おったでしょう」

忠宏は「あ」となるが、

忠宏「でもなんで彼女のことを？」

宮司「奥様はあの後も、毎朝お参りに来てい
たんじゃよ」

忠宏「毎朝？」

宮司「そう、毎朝」

忠宏「……」

宮司「それもおおきな声を出して拝んでおつ
た、あなたが小説家として大成するよう
と」

忠宏「……」

宮司「奥様はあなたのことを、本当に心配しておられましたぞ」

忠宏「……」

宮司「それが最近は見んでな、奥様はご病気かな？」

忠宏は自分の原付バイクへ向かって走り出す。

○ 繁華街の道（早朝）

忠宏の原付バイクが飛ばして行く。

○ 銀行・前（朝・開店前）

忠宏が開店するのをもどかしそうに待っている。

○ 同・銀行

開店してシャッターが開くや忠宏が入って来て、窓口カウンターを見るが、どの窓口にもかなえはいない。忠宏はフロアの案内係の女性のもとへ行き、

忠宏「あの、小宮かなえさんに会いたいです」

案内係「（警戒して）業務以外のことはお答えできかねますが」

忠宏「怪しい者じゃありません、及川忠宏つていいです、別れた元亭主です、どうしても彼女に会いたいです」

案内係「申し訳ございませんが……」

と、立哨している警備員に目配せする。警備員が足早に来る。

○ 郊外の道を忠宏の原付バイクが飛ばして行く

○ 住宅街

忠宏の原付バイクが来て、かなえの実家（戸建て）の前で停まる。忠宏は原付バイクから降りると、玄関のチャイムを鳴らす。

反応はなく、二度、三度、鳴らすと、インターホンから男の声（かなえの父親の声）がして、

男の声「もうお会いすることはないと申し上げたはずですよ」

忠宏「お願いします、僕が間違っていました、どうしてもかなえさんに謝りたいんです」

と、インターホンに懇願する。

男の声「お帰り下さい」

忠宏「お願いします！」

と、女性の声（母親の声）で、

女の声「警察を呼びますよ！」

と、インターホンが乱暴に切られる音がある。

忠宏「……（立ち尽くすしかない）」

○ 神社

先程の神社である。

忠宏が拝殿の脇で、項垂れて座っている。

忠宏「……（かなえと別れたことを初めて後悔している）」

ぽつぽつと雨が降り始める。

すぐにざつと本降りになるが、忠宏は濡れたまま座り続けている。

○ 忠宏のアパート

T『その翌年・1月』

薄暗い四畳半一間の部屋。

ただでさえ狭いのに、畳に直置きされた本が場所を取り、圧迫感すらある。

暖房器具はない。

どてらを着こんだ忠宏がビールラックを机代わりにして、ノートパソコンで小説を書いている。

忠宏「……（吐く息が白い）」

○ 大日本中央出版社（三ヶ月後・春）

都心にある小さなビルである。

○ 同・文芸部

村木（41）が自分の机で、思案気にパソコンを見ている。パソコンには『僕が女房と別れてから』というタイトルで忠宏の原稿が届いている。

村木「（どうしたものかのため息を漏らし）……」

○ 同・文芸部

その一角にある粗末な応接用のソファースेटに忠宏（34）と村木が座っている。

村木は渋い顔で、しきりに腕時計で時間を気にしながら、

村木「これじゃあただの美人局にあった男の話じゃないですかね」

忠宏「……はあ」

村木「これじゃ売れないっていうか……何も無理して前作に続いているのシリーズにしなくてもいいですよ」

忠宏「……はあ」

村木「先生、もうちょっと頑張ってくださいよ、お願いしますよ、それじゃ」

と、腕時計を見て立ち上がり、さつさと立ち去ろうとするが、こちらに来る男に気づいて思わず、

村木「先生！ どうされたんです」

男の声「ちよつと早めに着いたもんですから」

忠宏はその男の声を聞くなり「!?」と立

ち上がり、男を見る。

直幸である。

忠宏「（驚き）お前……こんなところで何してんだよ」

直幸（34）は照れたように、

直幸「いや、その……本が出たら言うつもりだったんだが……」

村木「（直幸に）先生、お知り合いですか？」

忠宏は村木を押しつけるようにして、

忠宏「本って、お前が？ お前、まだ書き続けていたのか？」

直幸「明日出版されるんだ」

と、バッグから一冊の単行本を差し出す。それを奪い取るように受け取る忠宏。タイトルは『世の中』とある。

忠宏「(あ)」

(フラッシュ)

直幸「お前、もうちょっと世の中の動きに敏感になれよ」

忠宏は立ち尽くす。

村木「(直幸に) ささつ、先生、美味しいイタリアンの店を予約してありますから」

と、直幸を連れて行くとする。直幸は行きかけるが振り向き、

直幸「林田先生が会いたがっていたぞ」

忠宏「(我に返ったように) あ、ああ……」

○ 私鉄電車が郊外へ走って行く(数日後)

○ 同・車内

菓子折りを膝の上に置いた忠宏が座っている。

忠宏「……」

向かいの男がスポーツ新聞を読んでおり、丁度一面が忠宏の方に向けられてある。

そこには、

『無敗の桜花賞馬シュガーレスラブ、ダービー挑戦決定!!』

と、文字が踊り、シュガーレスラブの写真が載っている。

忠宏はただぼんやりと座っている。

○ 郊外の、私鉄の駅前にある雑居ビル

その三階の看板に『林田作家養成所』とある。

○ 同・雑居ビル・前

菓子折りをぶら提げた忠宏がのろのろと来る。ビルの玄関前で立ち止まり、中に入るのを躊躇っていると、後ろから来た

男に押されるように中へ入る。

○ 同・林田作家養成所

林田久雄（72）が生徒の小説を読んでいる。忠宏が入口の所から遠慮がちに声をかける。

忠宏「先生」

林田は老眼鏡を外して忠宏を見ると、

林田「おお、及川君じゃないか、待ってたよ」

忠宏「失礼します」

と、入り、林田のもとへ来ると、

忠宏「どうも、ご無沙汰しまして」

と頭を下げ、「これ、どうぞ」と菓子折りを置く。

林田「おお、すまんね、遠慮なくいただくよ」

と、椅子を勧める。

忠宏「すみません」

と、座ると、林田が皮肉を込めた口調で、

林田「やっと離婚の挨拶に来たか」

忠宏「本当に……申し訳ありません」

と、頭を下げる。

林田「本当だよ、まったく」

と、笑う。忠宏は頭を下げるしかない。

林田「かなえ君が離婚の挨拶に来たよ」

忠宏「……僕が馬鹿だったんです」

林田「そうだな」

忠宏「……はい」

林田「まあ、今更何を言っても、覆水盆に返らずだな」

忠宏は頷くしかない。

林田「直幸君だってデビューしたんだ、君は

もっと頑張りなさい」

忠宏「はい」

林田「まあとにかく、これ読んでよ」

と、脇に置いてあった紙袋を忠宏へ押しやり、

林田「生徒さんの小説が二十本入ってる。評

価はABCでいいから、気楽に読んでよ」

忠宏「本当に僕なんかでいいんですか」

林田「今年は応募本数が多くてね、熱心なの

は嬉しいけど、ちょっと想定外かな」と、苦笑いすると、

林田「君も気分転換になっていいだらう」

忠宏「助かります」

林田「報酬は一本五百円で合計一万。それでいいかな？」

忠宏「それも助かります」

林田は笑い、忠宏も笑顔で頭を下げる。

○ 忠宏のアパート（翌日）

忠宏が丁度生徒の小説を一本読み終えたところ。忠宏はふーっと息を吐き出し、『林田作家養成所文学賞』と印字された評価用紙にBと記入する。

そして次の作品を読もうと紙袋から一本取り出すと、

忠宏「？」

その作品はやけに薄い。

タイトルに『盗作』とあるそれは、原稿用紙（四百字詰め）で二十枚ほどしかない。忠宏は苦笑するが、読み始める。

×

×

×

忠宏が横になっている。

眠ってはおらず、視線はビールラックの机の上に置かれたままになっている『盗作』に注がれている。

忠宏「……」

忠宏は起き上がると、プリンターを起動して『盗作』をコピーし始める。

○ 林田作家養成所（数日後）

忠宏がインスタントの珈琲を入れている。

林田は忠宏の採点表を見ながら、

林田「そういえば『盗作』っていう、プロットみたいなのがあったらう」

忠宏は一瞬ぎくりとするが、

忠宏「短いやつですか？」

林田は頷き、

林田「この作品は盗作だと訴えた人間が、実は盗作をしていたという面白いアイデア

なんだけどね、作者自身は小説にする気がないんだな、これが」

と、忠宏が出したくれた珈琲を飲み、林田「もう八十を超えたおばあちゃんなんだよ、作者は。アイディアさえ思いつけばいいそうさ。まあウチのお得意さんだからね、もう五年近く通っているのかな」

忠宏「……」

○ 定食屋（二ヶ月後・梅雨の夜）

短パンTシャツ姿の忠宏がカウンターで『盗作』のコピーを読みながら野菜定食を食べている。

忠宏「……」

と、隣の空席に客が座ると、慌ててコピーを隠すように仕舞い、食べ続ける。ふと、カウンターに置いてある店の新聞を取って捲り、文芸欄を出す。小説などの売り上げランキングを見るが、

忠宏「（驚く）」

直幸の『世の中』が第8位にランクインしており、書評には『今の時代を知るならば読むべき本』と見出しがついている。そして文芸欄の下半分には『世の中』の広告が掲載されてある。

忠宏「（激しく嫉妬して）……」

○ 忠宏のアパート（夜）

忠宏が帰って来る。部屋に入って来るやビールラックの机の前に座ってノートパソコンを立ち上げ、バッグから『盗作』のコピーを引っ張り出した。

○ 大日本中央出版社（二ヶ月後・8月）

その正面玄関から、村木が嬉しくてたまらないように、スキップして出て来る。

○ 高級鮭屋（夜）

そのカウンターに忠宏と村木がいる。村木は終始上機嫌で、

村木「いやあさすがは先生です、六年間待ったかいがありました、先生は必ずやって下さるって信じてましたよ」

忠宏は「嘘つけ」と思っているが、淡々とした口調で店の大将に、

忠宏「コハダ下さい」

大将「あいよ」

村木「女房に捨てられた作家が切羽詰まって小説書いてベストセラーになったんだけど実はそれが盗作で、元ネタの作家から盗作だと訴えられたんだけどその作家も盗作をしていたというドタバタをコミカルに描ききって、いや先生は前作もそうでしたけどこういうコミカルさが実にお見事ですよ」

と、一気にまくしたて、生ジョッキを呷ってから、

村木「これはいけますよ、十万部どころじゃない、もつといけますよ」

それでも忠宏は淡々と、

忠宏「お酒ももらえますか」

女将「はい」

村木「そこですよ、そこ」

忠宏「そこ？」

村木「六年前はこつちがドン引きするほどはしゃぎ回っていたのに、今は泰然としていらつしやる、風格さえ感じますよ」

忠宏「後ろめたさがあるからね」

村木「後ろめたさ？」

忠宏「あ、いや、何もかも村木さんのおかげです」

と、村木に頭を下げる。

村木「(ぐつときて)先生、今夜は徹底的にいきましよう！」

○ 同・店前(夜)

店の扉が開き、「先生またぜひお待ちしていますね」と笑顔の女将に送り出されて、忠宏と村木が出て来る。

村木「さあ先生、キャバクラに行きましょう」

忠宏「そうだね、行こうか」

と、酒が入り上機嫌になった忠宏が村木と共に歩き出す。

と、傍の電信柱の陰から中年の男がふらりと現れ、

男 「村木君」

と、哀願するかのように声をかけてくる。男はよれよれのズボンに汚れが目立つワイシャツ姿だ。

村木は顔をしかめて、

村木 「蓮根さん」

男・蓮根（51）は縋るように、

蓮根 「文芸部に電話したら多分ここだろうと教えてもらって……すまん、その……」

村木はぴしゃりと、

村木 「お金なら貸しませんよ」

蓮根 「そんな……」

村木 「あなたに義理立てする必要なんかありませんから」

蓮根 「頼むよ、お願いだ……」

と、目に涙を浮かべて頭を下げるが、

村木 「お断りします。（忠宏に）さ、先生、

参りましょう」

と、歩き出す。忠宏も歩き出しながら、

聞き覚えのある名前のように、

忠宏 「蓮根って……あの蓮根二三男？」

村木は表情を硬くさせたまま頷き、

村木 「そうです、盗作ですよ、例の盗作作家。

私が初めて担当した作家だったんです。そ

れがあのだ盗作で……私が今でもヒラなのは、

あいつのせいなんですよ」

と、恨みつらみを吐き出す。忠宏は振り

返る。蓮根はぼつんと立ち尽くして、こ

ちらを見ていた。

○ 忠宏のアパート（深夜）

忠宏がスマホで、『蓮根二三男』とか

『小説の盗作』とか『盗作の損害賠償』

とかを検索している。

忠宏 「……（恐ろしくなってきた）」

○ 大日本中央出版社・一階ロビー（数日後）
忠宏が暗い表情で正面玄関から入って来て、エレベーターに向かう。

と、丁度降りて来たエレベーターの扉が開き、中から出て来た村木とぼったり鉢合わせする。

忠宏「（思わずぎよっとする）」

村木「（ぱつと笑顔で）先生、どうされたんです」

忠宏「あ……ちよっと……実は……」

村木「丁度よかったです、これから先生の本を装幀して下さるデザイナーさんと打ち合わせなんですよ、ぜひ一緒にしませんか」と、忠宏の背中を押し出すように歩き出し、

村木「シユガーレスラブ、秋の天皇賞に直行するそうですね、凄いですね」

忠宏はやむなく歩き出しながら、

忠宏「あ、そうなんですか……」

○ 大型書店（二ヶ月後・10月）

店内の一番目立つ売り場に、コミカルで洒落た装幀が施された忠宏の本『僕の盗作』が山積みになされている。

○ 忠宏のアパート（二ヶ月後・12月）

木枯らしが薄い窓ガラスに吹きつけている。真つ昼間だというのに、忠宏は万年床で掛け布団を頭からすっぽり被って横になっている。まるで隠れているかのようである。

ビールラックの机の上には新聞の文芸欄が開いたまま置かれてあり、売り上げランキングの第2位に『僕の盗作』があると、ドアがノックされる。

掛け布団がぎくりと動く。

ノックは二度、三度、続く。

忠宏「……（布団の中で居留守を決め込む）」

ドアがゆっくりと開く音がする。

忠宏は思わず半身を起こす。

ドアの所に、やけに着飾った小柄な老女が立っており、怯えた忠宏の顔を見ると、顔をくしゃくしゃにさせてニヤリと笑い、老女「鍵ぐらいかけとかなきや、ボク」

忠宏「(全てを悟り)……」

老女・ミツコ(82)はドアを後ろ手で閉めると、靴も脱がずに室内に上がり込み、ビールラックの机の上にある新聞を取って見て、

ミツコ「十萬部超えたそうだね」

忠宏「は、はい」

ミツコ「じゃ、五千万でいいよ」

忠宏「え……」

ミツコ「口止め料。年内に五千万」

忠宏「(言葉もなく)……」

ミツコ「いや、クリスマスまでにしようじゃないか。クリスマスプレゼントだね。一括現金だよ、分割なんかじゃ駄目だからね」

忠宏「それはいくらなんでも……」

ミツコはビールラックの机の上に座ると、ミツコ「あんた印税8パーセントなんだろう？」

忠宏「ええ、まあ……」

ミツコ「つてことは、ざっくり計算すると、本が千四百円だから一冊売れて印税が百十二円、かける十萬部で一千二百二十万、三十萬部で三千三百六十万、五十萬部で五千六百万だろ。五十萬部売れたらあんたの手許に六百万も残るじゃないか、良心的な額だろう？」

忠宏「(感心して)よくすらすら暗算できますね」

途端にミツコはかっとなつて、

ミツコ「ふざけるのもいいかげんにおし！」

と、手にしていた新聞を忠宏に投げつける。

忠宏「……」

ミツコ「用意できなければ全てを公けにするからね。面白いね、『僕の盗作』の作者が本当に盗作をしていただなんてね」

忠宏「あ、あの」

ミツコ「なんだい」

忠宏「できればその、……話し合いを」

ミツコ「何を話し合うんだい？ こっちは今すぐ弁護士立てて警察に行ってもいいんだよ」

忠宏「で、でも……そうすれば、五千万は手に入りませんよ」

ミツコ「そうなるだろうね。でもそんな時はあなたと出版社を訴えるから。あなたはともない社会的制裁を受けることになるよ」

忠宏「……」

ミツコ「しかしあなたももう少し頭使ったらどうなんだい。あれじゃほとんど丸写しじゃないか、誰が見たって盗作だって言うさ」

忠宏「(言葉もなく)……」

ミツコはバッグから名刺入れを出すと、中から一枚出して忠宏へ放り、

ミツコ「連絡待つてるよ」

と、悠々と出て行く。

忠宏「……」

○ 大日本中央出版社・応接室

忠宏が村木に土下座している。

村木はソファアに座ったまま、怒りで顔を震わせて、

村木「なんで俺ばかり……蓮見といい、あなたといい、なんでクズばつかなんだよ！」

と、手にしている『盗作』のコピーをぐしゃりと握り潰す。

忠宏「(土下座したまま) 本当に……申し訳ありません！」

村木「こんなことが公けになったら社の問題どころか、私はクビですよ、クビ！」

と、テーブルをどん！と叩き、

村木「とにかくあんたが五千万作ればいいだけの話じゃないですか。それで済む話ですよ」

忠宏、顔を上げ、

忠宏「そんな……」

村木は忠宏に凄むと、

村木「作ってもらわないと困るんだよ」

忠宏「……」

村木「親でも兄弟でも金借りるよ」

忠宏「……親は離婚して、兄弟はいません」

村木「だったら印税前借りしろよ」

忠宏「え……」

村木「二百でも三百でも前借りして、それで競馬で五千万にするしかないだろ」

忠宏「……」

村木「よかったじゃないか」

忠宏「……？」

村木「今年の有馬記念は二十四日のクリスマスだ、シュガーレスラブに突っ込めばいいだけの話だろ」

忠宏「そんなにうまく……」

村木は席を立つと、

村木「自分だけいい子になるなよ」

忠宏「……」

村木「自分だけ首吊って、尻拭いを俺にさせんなよ、わかったな」

と、冷徹に言うのと、部屋を出て行く。

忠宏「……」

○ 歓楽街のはずれにある雑居ビル・前（夜）
直幸が来て、地下への階段を下りて行く。

○ ショットバー（夜）

カウンターの端で、忠宏がギムレットを飲んでいる。相当飲んでいるが、顔は青白く、全く酔えない様子だ。

店の扉が開いて直幸が入って来て、忠宏の隣に座る。

忠宏は直幸をちらりと見ただけでグラスを飲み干し、バーテンダーに、

忠宏「ギムレット」

直幸「ウオッカ」

バーテンダーは頷いて二人の前から去る。

忠宏は胸ポケットから茶封筒を出して直幸の前に置き、

忠宏「借りてた五万。今更だけど」

直幸「お前……顔、真っ青だぞ」

忠宏「高みの見物をしないか」

直幸「見物？」

忠宏「三百万を馬券で転がして五千万にするんだぞ、見ものだろ」

直幸「……何があった」

○ 中山競馬場・全景

有馬記念当日。スタンドは超満員となっている。

○ 同・パドック

午前中の、新馬戦のパドック。

今日デビューする18頭がパドックを周回している。

パドックを取り囲んでいる群集が血眼になってその18頭を見ている。

○ 同・スタンド内

パドックから少し離れた所。

忠宏が柱に寄りかかって床に座り、競馬新聞の新馬戦の馬柱表を見ている。傍で

直幸はパドックに目をやりながら、

直幸「パドック見なくていいのか」

忠宏は競馬新聞を見ながら、

忠宏「パドックなんか見たってわかんねえよ」

直幸「……」

忠宏「馬の目や肌の色つや、トモ（後ろ脚）や歩様なんか素人が見たってわかんねえさ。

プロが見たって馬券当たんねえんだぞ」

と、立ち上がると、

忠宏「⑩番だな」

直幸は競馬新聞を見て、

直幸「⑩番、ジャズメッセンジャーか」

忠宏「（モニターテレビのオッズを見て）8倍はつくな」

直幸「三百万突っ込めば二千四百万か」

忠宏「（頷く）」

直幸「でもなんで⑩番なんだ？」

忠宏「ジャズメッセンジャーのお袋さんも、

有馬記念当日にここでデビューして勝つて
るんだ。しかも馬番は同じ⑩番だ」

直幸「それだけか？ それだけで三百万も突
っ込むのか？」

忠宏はもう開き直ったように、

忠宏「不確かなパドックでの見た目なんかよ
り、よっぽど信頼できる情報だろ？」

直幸「それでお前、駄目だったら……」

忠宏「知ったことかよ」

と、スマホを出して馬券購入のページを
開く。

直幸「……」

○ 同・コース・ゲート

新馬戦の各馬のゲートインが始まってい
る。

○ 同・スタンド・観客席

ターフビジョンに映るゲートインの様子
を忠宏と直幸が見ている。

忠宏はそわそわとしており、もう我慢が
できぬといった感じで、

忠宏「お前、見てくれ」

と、言い残すや人混みをかき分けて行く。

直幸「お、おい」

○ 同・スタンド・男子トイレ

個室の扉が外から乱暴に開かれるや忠宏
が入って来て、便座の蓋の上に座るや頭
を抱え込む。

便意をもよおしたのではなく、怖くてい
てもたつてもいられなくなったのだ。

と、「各馬スタートしました」と実況ア
ナウンスの声が個室にまで聞こえてくる。

忠宏はぶるぶる震えながらそれを聞いて
いる。

実況は二コーナーから三コーナー、そし
て最終コーナーを回って最後の直線に向
くと、

実況「ここでジャズメッセンジャーが先頭に

立った、強い、強い、後続馬を引き離して
ゴールイン！」

忠宏は全身から力が抜けてしまったかの
ように、安堵の息を長々と吐き出す。

○ 同・スタンド・地下

ファストフード店などの飲食店が立ち並
ぶエリア。どの店舗にも長蛇の列ができ
ている。隅で忠宏と直幸が立ったまま牛
丼を食べており、忠宏はガツガツと掻き
込んでいる。

直幸「よく食べるな……」

忠宏「腹が減ってはってやつさ」

直幸「五千万できたらどうすんだ？」

忠宏「（箸を止め）……」

直幸「あの婆さんに五千万払って、あとはダ
ンマリか？」

忠宏「……」

直幸「（忠宏を探るように）……」

忠宏「五千万作ってから考えるさ」

と、またガツガツと食べ始める。

直幸「……」

○ 中山競馬場・上空

テレビ局のヘリコプターが旋回している。

○ 同・パドック全景（空撮）

有馬記念のパドックを、無数とも思える
人々が幾重にも取り囲んでいる。

○ 同・パドック

有馬記念に出走する各馬がパドックに現
れるのを、多くの人々が今か今かと待ち
構えている。

その中に、第一話の裕子と吾一郎がいる。
と、どよめきが起こる。

裕子・吾一郎「？」

どよめきは更に大きくなる。

○ 同・スタンド内

新馬戦の時と同じ柱に忠宏が寄りかかって座り、競馬新聞の、有馬記念の馬柱表を見ている。

と、ここでもどよめきが起こる。

忠宏「(競馬新聞から目を離し)？」

直幸もどよめきに気づき、周囲を見廻すが、顔色を変えて、

直幸「おい、あれッ」

と、パドックの電光掲示板を指差す。

忠宏が立ち上がり電光掲示板を見る。

電光掲示板には出走各馬の馬名が表示されているが、シュガーレスラブのところが『出走取消』と点滅している。

忠宏「(思わず)出走取消だ?!」

直幸「(も信じられずに)……」

忠宏は呆然と立ち尽くす。

○ 門脇総合病院・馬場の個室

馬場が未だに信じられぬ顔で、テレビの有馬記念中継を見ている。男性アナウンサーが原稿を読み上げている。

「シュガーレスラブは、装鞍所(そうあんじょ)で他の馬に蹴られたため、有馬記念を出走取消となりました。繰り返します、シュガーレスラブは……」

馬場「(がつくりと)……なんでやねん」

○ 中山競馬場・全景(空撮)

『第三話 中山最終レース』

○ 同・スタンドのモニターテレビ

有馬記念の結果と払い戻し金額を表示している。払い戻し金額は高配当で、ドクターウォークは5着となっている。

○ 同・スタンド内・階段

階段に、裕子と吾一郎が並んで座っている。吾一郎は力なく笑うと、

吾一郎「僕たちにはツキがなかったね……」

裕子「……私たち、どうなるんです？」

吾一郎「病院に戻るしかないだろう」

裕子「私は戻りたくありません」

吾一郎「……」

裕子「私、次の最終レースで買いたい馬券があるんです」

吾一郎「ほう、どんな？」

裕子「今までの、自分の人生を賭けてみたいんです」

吾一郎「……」

裕子「馬場さんが言っていました、有馬記念の次の最終レースは、そいつの生きざまを賭けるレースだって」

○ 同・スタンド内・券売機の前

券売機から一枚の馬券が出て、裕子がそれを取る。

そのまま列の後ろの方に立っている吾一郎のもとへ行き、

裕子「買って来ました」

と、馬券を吾一郎に差し出す。

馬券は3連単⑬↓⑥↓⑫、購入額は十万円になっている。

裕子「人生で、最初で最後の馬券です」

吾一郎「なんでこの組み合わせなんだい？」

裕子「馬体重（ばたいじゅう）の大きな順なんです」

吾一郎「……」

裕子「出走する馬のうち、⑬番が一番重くて、

次が⑥番、その次が⑫番なんです」

吾一郎「……」

裕子「体重で嫌な思いばかりしてきたから……せめて一度くらいは、体重でいい思いができたらいいなって思っ」

吾一郎「……」

裕子「でも3連単って凄いですね、この馬券が当たったら三億五千万ですって」

吾一郎「……来るよ、これ」

裕子「ホントですか？」

吾一郎は真剣な眼差しで、

吾一郎「うん、必ず来るよ、これは」

○ 同・スタンド内

忠宏が柱に寄りかかって座り、競馬新聞の、最終レースの馬柱表を血眼になって見ている。しかし考えがまとまらない。完全に追い詰められている。

忠宏は競馬新聞をぐしゃりと丸めると、頭を抱え込んでしまう。傍で直幸が、憐れむように忠宏を見ている。

と、忠宏が、何かを思い出したように顔を上げる。

直幸「……？」

忠宏は丸めた競馬新聞のシワを伸ばすと、赤ペンでシルシをつけて立ち上がり、

忠宏「この四頭で勝負する」

と、直幸に競馬新聞を見せる。

⑤番と⑧番と⑩番と⑭番にシルシがついている。

直幸「なぜこの四頭なんだ？」

忠宏「……」

直幸「なぜだ」

忠宏「かなえの誕生日だ」

直幸「……よした方がいい」

忠宏「昭和58年10月14日。だから、⑤

⑧⑩⑭だ」

と、冷笑すると、

忠宏「もう他に思いつかないんだ」

直幸「もう彼女はお前にとって勝利の女神じゃないんだぞ」

忠宏「じゃ、どうすればいい」

直幸「(競馬新聞を見る)」

忠宏「じゃ、どうすればいいんだよ」

直幸「よく見ろ」

と、競馬新聞を忠宏に押し戻す。

忠宏「なんだよ」

直幸「頭文字を、よく見てみる」

忠宏「頭文字だ？」

と、シルシをつけた四頭を見ると、

⑤ トップガイ

⑧ ウチポケット

⑩ サクラダスカイ

⑭ クロキマジック

忠宏 「(あつと気づき) トウサク……」

直幸 「……」

忠宏 「トウサク……盗作馬券かよ」

と、顔を歪める。

そしてげらげらと笑い出し、ずるずると座り込むが、それでも笑っている。

直幸 「……買うのか？」

忠宏 「買うわけないだろ」

直幸 「……」

忠宏 「俺もここまでか……」

と、立ち上がり、持っていた競馬新聞を傍のゴミ箱に捨てると、

忠宏 「ちよっとつきあつてくれないか」

○ 最終レースのゲートが開き、各馬が一斉にスタートする

○ 同・スタンド・観客席

大観衆の片隅で、裕子と吾一郎が願いを込めてレースを見ている。

馬郡は二コーナーから三コーナー、最終コーナーを回って最後の直線に向く。

大観衆のボルテージは最高潮に達する。

と、馬郡の後方から⑬番が各馬を抜き去って先頭に立ち、その後ろに⑥番と⑫番

が続く。裕子の買った馬券の通りだ。裕

子と吾一郎が「行けー!!」と、絶叫し、

そのまま⑬番↓⑥番↓⑫番の順でゴールインする。

——ここからスローモーション、無音となり、裕子と吾一郎が歓喜の表情で抱き合うが、

吾一郎 「(苦悶の表情を浮かべる)」

心臓発作を起こした吾一郎の全身から力が抜ける。

裕子は異変を察し、吾一郎を見るが、吾一郎はそのまま崩れ落ちる。

裕子 「(院長、院長!!)」

と、叫び、吾一郎を抱き起すが、
裕子「——!!」

吾一郎は絶命していた。（スローモーションと無音、ここまで）

○ 日本ニュース通信社

都心にある、大きなビルである。

その前にタクシーが来て停まり、忠宏が降りる。そのまま、正面玄関へ向かって歩いて行く。

一緒に乗っていた直幸が、タクシーの後部座席から、

直幸「……（建物の中へ消える忠宏の後ろ姿を見ている）」

○ 門脇総合病院・全景（数日後）

雨が降っている。

○ 同・更衣室→通路→職員通用口

更衣室の扉が中から開けられ、私物を入れたポストンバッグを持った裕子が私服姿で出て来る。

そのまま通路を歩いて行く。

擦れ違う看護師や医師から好奇の目を向けられる。中には蔑む目を向けてくる者もいる。裕子は表情を変えず、毅然とした態度で歩いて行き、そのまま職員通用口から外へ出て行く。

○ 走るタクシーの中

裕子が乗っている。

信号待ちになり、雨で濡れる窓越しに、隣のビルの電光掲示板に流れる日本ニュース通信社のニュースが見える。

『小説家の及川忠宏さん、自作を盗作だと発表し謝罪』

『江田神村役場に郵送された送り主不明の馬券は、3億5千万と判明』

信号が青になり、タクシーは走り出す。

○ 羽田空港・国内線出発ロビー
裕子が来て、電光掲示板を見る。
悪天候のアナウンスが流れており、ほぼ
全便が欠航となっているが、大阪便だけ
が運航となっている。
裕子はそれを見ると、チケットカウンタ
ーへ向かう。

○ 降りしきる雨の中、羽田空港から旅客機
が離陸して行く

○ 下町の住宅街（早朝）
T 『有馬記念の翌年・2018年』
朝刊を満載した新聞配達員が原付バイクが
走って行く。運転しているのは、顔を隠
すようにマスクをして、深々とキャップ
とヘルメットを被っている忠宏（35）
だ。

○ マンション・前（早朝）
忠宏の原付バイクが来て停まり、忠宏が
集合ポストに慣れた手つきで朝刊を次々
に入れていく。

○ 新聞販売店・外階段（朝）
配達を終えた忠宏が、コンビニの袋をぶ
ら提げて外階段を上がって行く。二階は
寮の個室になっている。

○ 同・忠宏の部屋（朝）
ドアが外から開けられ、忠宏が入って来
る。座卓と小さなテレビがぐらいいかない、
ひどく殺風景な六畳一間だ。
忠宏は座ると、腰ポケットから朝刊を出
して捲り、社会面を見る。隅に小さな記
事で『小説家の及川忠宏さん、盗作訴訟
で和解、示談成立』とある。

忠宏「……」
しばしその記事を見ているが、コンビニ
で買ってきた野菜ジュースとサンドイッ

子で朝食をとりはじめる。
新聞を捲りながら飛ばし飛ばし見出しを
見ていくが、スポーツ欄で手が止まる。
『シュガーレスラブ引退』と囲み記事に
あり、シュガーレスラブの写真が載って
いる。

忠宏「……」

忠宏は今までの想いを込めて、その写真
をじっと見た。

○ 病院の休憩室

冒頭のシーンの続き。

主任看護師の裕子が、シュガーレスラブ
のボールペンを弄びながら、物思いに耽
るように窓外を眺めている。
遠くに通天閣が見えている。

と、胸ポケットのピッチが鳴る。裕子は
現実に戻されたかのように、短く息
を吐き出すとピッチに出る。

裕子「はい北村」

と、言いながら、足早に休憩室から出て
行った。

(終)

(備考)

本文枚数

55枚

(二百字詰め原稿換算 219枚)

参考資料

『看護師という生き方』

(ちくまプリマー新書)

著者 宮子あずさ

発行所 株式会社筑摩書房

『ぴんとこなーす』

著者 ぶろぺら

発行所 株式会社いそつぷ社